

令和5年度
習志野市男女共同参画週間事業講演会

認めあう社会へ 私ができること！私から変わろう！

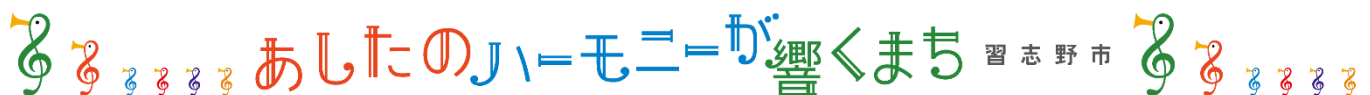
報告書

令和5年7月2日(日)

午前10時～正午

サンロード津田沼6階 大会議室

オンライン(Zoom)同時開催



主催：習志野市男女共同参画週間事業運営委員会・習志野市

■概要

テ ー マ : 「認めあう社会へ 私ができること！私から変わろう！」

開 催 日 時 : 令和5年7月2日(日) 午前10時から正午

開 催 場 所 : サンロード津田沼 6階大会議室

主 催 : 習志野市男女共同参画週間事業運営委員会・習志野市

受 講 者 : 会場30名(運営委員含む)／オンライン12名

■構成

司 会 佐藤 佐知子
習志野市男女共同参画週間事業運営委員会 副委員長

2:00～2:10 開会挨拶

植松 礼子
習志野市男女共同参画週間事業運営委員会 委員長
宮本 泰介
習志野市長

2:10～3:20 講演会

「認めあう社会へ 私ができること！私から変わろう！」
講 師 牧野 篤 氏
東京大学大学院教育学研究科 教授

3:20～3:50 質疑応答

3:50～4:00 閉会

■協力

今年度の男女共同参画週間事業のテーマは「ジェンダーギャップ指数から考える意識改革(主に教育分野の視点から)」です。
市内の図書館には、「ジェンダー」について学べる書籍があります。今年も中央図書館では、講演会とのコラボ展示を実施し、男女共同参画センターが主催する講座の紹介や関連図書のブックリストの配布を行いました。

期間: 令和5年6月1日(木)～7月2日(日)



展示の様子

■講演内容

認めあう社会へ 私ができること！私から変わろう！

— 自由・平等、そして「共同」—

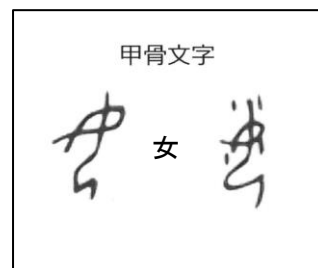


甲骨文字から見た「女」「婦」について

テーマは「認めあう社会へ、私ができること、私から変わろう」ということでいただきました。私自身が男女共同参画のことに詳しく言及したことがありませんので、どんなことをお話しできるかという考え、副題として「自由・平等、そして『共同』」とさせていただきます。先ほどの市長さんのお話から、アンコンシャスバイアスという話が出ましたが、私にもあると思います。それから、私自身のいわゆるジェンダーアイデンティティは男性ですので、なぜ女性がここに立っていないのかなと思ひながら、男性の私から申し上げることで、参考にしていただけることがあるのではないかなと思ひ、今日ここに参りました。例えば、日本語で格差・差別・差異は、英語で順番に Gap・Discrimination・Difference、中国語では差距・歧视・差異と、それぞれ意味が違います。先ほどジェンダーギャップ指数の紹介があつて、日本はどんどん下がっているということでした。私たち自身がこれをどう考えるのか、まず少しお話ができればと思います。

最初に、何が問題なのかということで、甲骨文字を見ていきます。会場のトイレには、「紳士」と「婦人」と書いてありました。今、この「婦人」という言葉は、もうあまり見ないですね。「婦人」がほとんど「女性」に代わりましたが、いつ頃に代わったと思われませんか？私もはっきりとは知りませんが、ジェンダーが問題になったり、ウーマンリブという時代があつたりして、女性の権利を主張する中で代わってきたのです。例えば、「女」という字は、ある意味で目の敵にされる時があります。「女」という文字は、腕を前に組んで跪いて頭を下げているという象形文字なのです。それをとらえて、女性が男性にかしづいているのだから、この女という字はいけないのだと。でも本当は、神霊の宿る場所に対して跪いている。それが、なぜ男にかしづいているという解釈になつ

たのが問題です。さらに、婦人の婦は、女偏右側に「ほうき」(「フ」と読みます)がついているのですが、これをもって家事をする女性なのだという方がいらっしゃる。それでこの文字は、女性を家に閉じ込めておくことを意味するものだといわれて、排除されることになったかと思います。紀元前の中国では、「フ」は神殿を清めるために用いられる道具であって、掃除道具ではありません。宗教的な儀式に用いられる重要な道具だったのです。それがなぜ掃除道具といわれるようになったのか、そこを問わなければいけないのではないかと思います。言い方を変えると、男尊女卑であったり、男中心社会といったことに対して、そういう先入観をもって漢字を見てしまうと、そう見えてしまうということが起きているのではないか、というように思ったりします。



男にもつわりがあった

中国は社会主義で、男女平等であるからこそ、男女別姓なのだという言い方がされますけども、これは違います。儒教国家はすべて、男女別姓です。ですから、韓国でもそうです。日本も明治に民法を導入してから男女同姓になりました。これはヨーロッパに学んだということになります。男女同姓は、日本の伝統ではなくて 1896 年の民法制定以降なので、まだ 120~130 年の歴史がありません。それ以前は別姓というか、ほとんどは無姓でした。こういう思い込みといったことが、いろんな人々の考え方を縛ってしまっていて、または解放されていてもいいはずの人達をそれで縛りつけてしまっている。また、自分自身もそれで縛りつけてしまっていないだろうかと思ったりします。

ちなみに、つわりというのは女性特有のものなのでしょうか。実は、私はつわりがひどくて、それで関心を持ったのですが、男にもつわりがあるのです。まだ、言葉にも残っています。福島県では「トモクセ」、岩手県では「男のクセヤミ」、長野県では「アクソトモヤミ」という呼び名(方言)が昔からありました。明治時代には男がつわりで吐いたという記録もあるようです。つわりは一般的には心身症的な症状、親になる不安などと言われていますが、昔はつわりがきて初めて妊娠したと分かって喜ぶということがあったのではないかと思うのです。そうすると親になる不安から吐くという議論は、そこでもう成り立たないのではないのでしょうか。それから、大体 6 カ月ぐらいになってお腹が出てきて、安定期に入るとつわりは治まりますよね。そうすると、周りの誰が見ても赤ちゃんがいることがはっきりしていますよね。そういう意味では、私はその専門ではありませんから分らないのですが、つわりは、赤ちゃんがここにいるよと、まだ目立たないけどと、メッセージを発しているのだと解釈できないかと思います。例えば出産の時期も赤ちゃんが決めていることは分かっています。自分がこの女性のお腹の中にいる。だからこの女性のことを大事にしてくださいね、と社会的にメッセージを発しているのではないのでしょうか。そうすると、当然その女性と一緒にいる男性の方もその影響を受けて、気持ちが悪くなったり吐き気がしたりということがあるのではないのでしょうか。そしていまだに、未開部族社会では、男が「擬産・擬娩」という、子どもを産むというこ

とをやる部族があるのです。そうすると女性は楽になるといいます。女性が妊娠をすると、部族の男全員が吐き合うお祭りを持つような部族もあると聞きます。そうしたものがなくなって、男性が吐かなくなってくるといったことも含めて、男女を分ける社会ができ上がってきた。こう考えたらどうでしょうか。

例えば、昔、主婦論争というのがあって、主婦という家庭の中に女性が入っていることが、良いことなのか悪いことかという論争がありました。例えば、私の専門の教育学では、PTAに関わって、働いている女性が「忙しいのに役員なんかできない」というと、PTAの役員の女性たちが、「自分の子どものことに関わることなのに、何を無責任な」と批判する。そうすると働く女性は「あなたたちは主婦だからいいわよね」という話になって、対立しそうになることも起こりました。また、ある女性生物学者が、「私は女性で良かった」と言って、物議を醸したことがあります。なぜ女性でよかったのかというと、生物学的には、男性は闘争本能のようなものを持っていて、すぐ喧嘩をする。また、すぐ派閥を組んで、お互いにいがみ合うようになっていく。上を見ていれば、男が出世して男が偉そうにしているけれど、実は途中で男は死屍累々なのだ、たくさん敗れているのだと。女性は、ある意味では仲良くやっていきながら、中間層のところがいっぱいいて、男性から大事にしてもらう。だから、女性で良かった、というのです。

「女性で良かった」と言っているのですが、今は、実は女の社会も死屍累々だと言われるわけです。これは私の個人的な経験ですが、私の知人のカナダのフェミニストの女性研究者が、アジアの男尊女卑の状況はひどいと受け取っていたので、「日本に来たらどうですか、数字だけ見てないで」と誘いました。彼女が見た日本の男女のあり方というのは、例えば、昼間、私たちがホテルのロビーや喫茶店で打ち合わせをしていると、周りは女性のグループばかり。彼女がそれを見てこういいます。「彼女たちは一体何をやっているのか、女性だけでご飯食べているが、仕事なのか。」私は「いや仕事じゃないと思います。楽しみでここでご飯食べている。」と。「あれは自分のお金で食べているのか。」「いや、旦那のお金じゃないですか。」「旦那はそれを許しているのか、そんなにたくさんもらっているのか。」「いや、旦那が小遣いをもらっているんだ」と話をすると、「なぜだ」という話になりました。それからもう一つ、研究旅行に行くために、特急に乗ると周りは女性のグループばかりで、また彼女が「この女性たちはどこに行くのか」「こんな風でできるのは、よっぽどの有閑階級なのか」といいます。私は「いやそうじゃなくて普通の女性たちですよ。」「なぜ可能なのか。」「いや別に問題ないじゃないですか。」「家庭で旦那は許しているのか。」「許すも許さないも、妻が旅行に行くといえば、夫はそれを認めているのだと思いますよ。」「金はどこから出ているのか。」「だからお金は全部彼女が管理して、誰が出しているという話じゃない。」と言うと、彼女は「理解できない」といい出す始末。最後に言った言葉が「日本社会では、男性こそが解放されなければならない」でした。今は、この経済状況で、男性も女性も同じような状況です。専業主婦も少なくなってきた。もう共働きでなければ家計が維持できないような状況の中で、様々に苦しんでいます。

自由で平等だから格差が生まれる

大事なことは一体何なのかということが見えなくなっているのではないのでしょうか。それが今日のテーマである、自由とか平等という問題と、それから「共同」ということになります。先ほどご紹介があったジェンダーギャップ指数について、資料を作った時には昨年度のデータしかなかったのですが、日本は122位だということなのです。ただ、このジェンダーギャップ指数の平均をとっていくと、実は平均国はマレーシアなので103位です。150何カ国あって、ウルグアイは72位です。日本は下の方の122位です。昨年の数字だと、健康や教育は世界トップクラスで、教育は1位だった。特に経済と政治の面での女性の参画が遅れている。とりわけ経済。年収とか、働き方も含めて、これを何とか是正をしなければいけないと言われていています。

平等にしようと盛んに言われていますが、あとからお話するように、実は格差が生まれてしまっているのは、平等だからです。私たちの感覚からいうと、自由で平等だから格差が生まれている。自由と平等って一体何なのかといったことを問わなければいけなくて、本来は自由と平等はトレード・オフで、両立しないのですが、今この国では両立することになっていて、そして、平等だから実は問題が起こっているという面があるのです。不自由で不平等で良いのかと叱られそうですが、そういう意味ではありません。自由と平等ということも実はあるものが介在していて、言われている一つの概念であって、それを違う自由と平等に組みかえないと、このまま使っているのは、格差はなくなるだろうと思います。それは言い方を変えると、先ほどの女という字が男にかしづいているのだと、解釈をするような議論と重なってくるということになるのです。

少子高齢・人口減少社会はよくないのか？

例えば、今、少子高齢・人口減少社会です。私も、様々な経済界の議論や政策にも関わりを持っていますが、これが悪いのだという議論から一向に抜け出せない人が多い。少子高齢化というのは良くない。人口減少したらいけないのだ、というのです。みなさん、これはまずいのではないかと思いますか？ いまでは、日本の高校2年生の子どもたちの予測平均寿命は107歳だといわれます。高校生たちにこの話をすると、ほとんどの子が「嫌だ、生きていてもいいことないもん」と言います。そういう社会であることが問題なのであって、長生きの問題ではないはずで、日本人の人口は、毎年約70万人ずつ減っていて、これから100万人ずつ減ることが予測されています。もし、これを出産と外国人の導入で何とか維持しようとする、相当無理をしないとできません。例えば毎年100万人ずつ外国人を入れなければならない。または、子どもたちを毎年180万人産んでもらわなければいけなくなる。それが可能なのかというと、不可能です。平均寿命は、戦後70年間で約35歳伸びています。終戦直後が約50歳でした。明治・大正期は40歳でした。それが戦後70年間で84、85歳ぐらいまで伸びています。みんなが長生きできる社会ができた。乳児死亡率を見ると、新生児1,000人あたりで、1歳になるまでに亡くなる赤ちゃんの数は、今、日本は1.9で、世界で一番少ない数です。今回コロナ禍で、よく比べられる100年前のスペイン風邪の頃は、10人に2人の赤ちゃんが1歳にならなかった。今は1,000人に2人です。これが悪い社会なのかと言うと、良い社会ははずです。これが実は少子化の大きな要因なのです。ちゃ

んと子どもが大人になる社会を作ってきたのです。少子化は、全世界の傾向なのですが、日本も同じだったのです。生まないのがいけないというふうになると、子どもが死ぬことが不安で仕方がない社会に戻せというのかという議論にもなりかねない。

そうではないはずです。私は今年 63 歳ですが、きょうだい 2 人、子どもは 2 人しかいませんので、自分も少子化の世代で自分の子どもも少子化なのです。私は 1960 年の生まれで、父母が 1930 年くらいで、祖父母が 1900 年くらいの生まれです。だいたい 30 年ずつくらいで、世代が変わるのです。母が言うには、両親が生まれた当時は、跡取りが欲しかったので男の子が欲しいわけです。男が生まれるまで産み続けたのです。しかも、今だったら、生まれた男 1 人生まれればもう安心だから、もうこれで打ち止めになるけれども、実は、死んでしまうかもしれないと不安だった。近隣もみんなきょうだい 10 人とかで、だいたい 2 人か 3 人亡くなっているというのです。しかし、私が生まれた頃はみんな病院で生まれていたし、経済状況も良くなって、栄養も良くなって、子育ての仕方も教えてもらえて、健康で丈夫な赤ちゃんを育てることができるような社会システムができてきている。だから、子どもをたくさん産む必要がなかった。さらに、これから学歴社会になってお金がかかるとあれこれ言われていたので、あまり産まなかった。こういう社会では、私の両親のようにたくさん生まれている世代もちゃんと大人になれてしまうので、急激な高齢化が起こるのです。そしてその方々が亡くなり始めると、どんどん人口が減っていく。少子高齢化と人口減少というのは、実はみんなお腹いっぱい食べられて、医療が発達して、環境も良くなって、しかも平和な社会だからこそ、そうではない社会に生まれていた人が長生きになって、急激に人口が増えて、これから急激に減っていくのです。だから、少子高齢化・人口減少とは子どもが死なない、誰もが長生きできる社会をつくったから、そうなったのです。そういう条件をきちんと使える社会にしておかなければいけないということです。

0 歳から 14 歳を子ども、15 歳から 64 歳が生産年齢人口といって、一応、統計上働いて税金を納めている人、65 歳以上が高齢者で、統計的には子どもと高齢者を従属人口と呼びます。働いてお金を儲けている生産年齢人口の人たちに依存している存在なのだという言い方をします。今では、多くの女性が最初から働いて、社会でいろんな活躍をされています。だいたい 35 歳くらいで 1 人目か 2 人目を産んで、産まない方もいらっしゃるが、50 歳くらいで子どもが、高校生や大学生になったりする年に入るので、手が離れていきます。

価値観の変容

しかも、今家事はほとんど全自動ですし、様々な社会サービスがあつてそんなに大変なことではない。実は、男性も女性もお金があり時間があり、様々な価値を持った人たちがたくさん活躍できるような社会が、生まれてきているということなのです。それをうまく活用しないで、従来のように、大量生産・大量消費の工業社会的な感覚で、人々の価値のあり方や活躍の仕方を考えていると、人口減少社会は怖くて仕方がないのです。市場が小さくなっていきますから、お金が儲からなくなる。または経済規模が小さくなっていく。GDP(国内総生産)を中国に抜かれる。そんな話ば

かりが出てきてしまいます。その感覚が、女性は男性に較べて劣っていると秩序付けるような感覚と結びついているのです。

さらにそれはなぜかという、平等だからです。そこをご理解いただきたいと思っています。イースタリンの逆説という議論があります。経済学では一般的な議論です。何かといいますと、貧困な状態、例えば私たちの子どもの頃は、経済が発展して、家計が豊かになることが幸せだったので。お金が増えてモノが豊かになることが幸せだった時期があるのですが、日本は実はそれがすでに過ぎてしまっているのです。今やお金が増えると、幸せ感が下がるという時代に入っています。主観的幸福感について、国の外郭団体の研究機関が研究しているのですが、これを決める要因は何かというと、健康であることが大事なのです。もう一つは人間関係、よい友だち関係がある、ここまでは変わりません。しかし、従来はさらにそこに学歴とか年収が入っていたのですが、今はもう学歴は幸せ感とほとんど関係がないことが分ってきています。例えば東大に入るといい企業に入れて、出世して、たくさんお金をもらえと言われていたと思うのですが、今、入ってもあまり幸せではないのではないかとの話が出てきている。年収が増えることもそんなに幸せではなくなって、実は何が大事かという自己決定できるということなのです。自分で自分の人生を決められるといったことが、今の若い世代にとってはとても大事になっていると分ってきています。さらに年収に関する研究で、年収が増えると、幸福感が増えるかということ調べた研究なのですが、年収が低い段階では、上がるとちょっと幸せになるのですが、1,000万円を超えてくると、幸せ感が下がっていく。負担感が増えていってしまうということが分かっています。以前、著名な経済学者のケインズは、孫に宛てた手紙の中で、将来は、週15時間労働の時代がやってくる。その頃には、金銭的成功が犯罪的で病的な性癖と呼ばれるようになるだろうと書いていました。日本は週40時間ですけども、今ドイツは、法的には35時間にしてきています。ケインズが言ったのは、週15時間で今のものが賄える社会がやってくるのだ。これまで余暇時間とは労働の余暇だったけれども、これからは労働が実は余暇にあるものであって、他にもっと人間としてやるべきことをやる時代がくると言っていたのです。従来のような大量生産・大量消費ではないような生き方が問われるということなのです。

学校を持つ社会(近代産業社会)の行き詰まり

学校も実はもうこんなことになってきています。今、だいたい1クラスに1人ぐらいの不登校の子が出てきています。しかも、選択的不登校と呼ばれている子が増えてきています。どういうことかという、今までは不適應で学校に行けなかったのですが、今は自分で選んで行かない子たちが増え始めています。高校への進学希望調査でも、全日制という大学進学に繋がるような高校に行くことを選ばない子どもたちが始まっていて、その子たちはどこに流れているかという通信制に流れているのです。実は昨年、今年と通信制の高校はもう定員オーバーで困っているぐらい応募者があるといいます。私がつき合いのある不登校の子どもたちの中には「勉強は好きだけど学校が嫌い」という子がいます。学校に行かなくても勉強ができることを、このコロナ禍で覚えてしまった。オンラインで勉強して、もっと社会に関わって、大人たちと一緒にいろんなことができるのだ

と分かってきた。何で一斉に学校に行かなければいけないのかが分からない、といいます。「一斉に」といったところがミソなのです。

先ほど平等だという話をしましたけれど、学校のことを見ていただくと、平等とか自由とか一体どういう形で作られているかがよく分かります。学校というのは、みんなが同じように働いて、同じようにお金を儲けて、同じように物を買って、消費をして、経済の規模を拡大していく、人口が増えることを良しとするような社会、つまり規模が大きくなることを良しとする社会を作るための装置として作られてきたという面があります。明治以前の学校は、例えば庶民の学習場所として寺子屋がありました。個別学習の場所なので、一人ひとりが自分で読み書き算盤を練習しては先生の前で読んだり書いたり算盤をやってみせたりして良しとなる。一見、遊んでいるみたいな状態であって、それぞれの進度に応じてそれぞれの指導を受けるということでもよかった。これが実は庶民の学習場所であった。今の学校は、先生が前に立って子どもたちが座っています。しかも学校によっては手の挙げ方まで決まっています、何か分からないけど、まっすぐあげるとかいろいろあるらしいですね。明治41年1908年の学校風景と、今の学校風景はほとんど変わらないです。さらに今から200年ぐらい前、イギリスのランカスター教授法というクラスですが、学校の教室の構造はほとんど変わらないのです。ただ、違うのは、大人数の中に人がモニターとして入って、子どもたちは一挙手一投足全部直されるようになっているのです。一斉授業です。皆さんは一人ひとり違っているはずですが、ここにいらっしゃる方は年齢も違いますし、個性も違います。顔つきもちろん違いますし、体型も違うのですけれども、でも教育は一斉に行っている良いことになっているのです。なぜなのでしょう。

例えば、これは紡績工場ですが、明治期の製糸工場のあり方と学校とはそっくりな構造なのです。一望監視装置という構造をとっています。これは囚人を合理的に管理するために考え出された構造ですが、監獄の真ん中に看守所があって、周りに独房がずっと配置されていて、独房からは看守所しか見えないように、窓が切つてあるのです。日本でも、例えば金沢監獄、これ平屋ですが、同様の作りになっていました。つまり、他者の目、いいかえれば権力者や権威者の目を自分に埋め込む、いつも上のもに見られているという意識を植え込むことで、自律的に自己規制するという仕組みなのです。学校は、上に立つものつまり教師が、上下の関係をまず空間的に作るということと、それから上のものが下のもつまり子どもを監視できるようになって、子どもたちに見られているということを意識化させてしまえば、あとは見ていなくてもきちんと勉強するようになるし、おとなであれば働くようになるのです。それを他者の目を内面化させるといいます。またそこには当然、見守られているという感覚も滑り込んでいます。

みんなが同じく働く能力を持っている、だから平等に扱うのだという考え方で、これが作られているのです。だから、一人ひとり違う個性を持っているけれども、みんな平等なのだ。どこが平等かという、人間としての本質は平等なのだという言い方をして、そういうものを作ってきているのです。例えば、昔の大学は、階段教室でした。東大にもまだありますが、ここで授業やると、学生の

顔をつい見てしまうくせがついているので、首が痛くて仕方がない。何でこうなっているかという
と、もともと教師が大きな教卓で実物教育をやってみせて、学生たちが上から覗き込んでいたの
です。教師はすり鉢の底にいたのです。なぜかといえば、彼らは放っておいてもきちんと学ぶから
です。今の大学はこうではなくって、小学校と同じような構造になっています。今の学生は勉強
しないと考えられているのですね。

みんな同じように扱っておいて、同じことを教え込んで、同じように、先生から見られているという
意識をつけさせて、さらに、先生が見ていなくても社会から見られているという意識をつけさせ
て、同じように行動するように、つまり同じようにお金を儲けて、同じように物を買うようにという仕
組み、つまり大量生産・大量消費で、経済の規模が拡大する社会を作ってきたのです。これが平
等ということだったのです。

ぜいたくの民主化

この仕組みは、消費にも応用されています。100年前のスーパーマーケットと今のコンビニはほと
んど同じ作りなのです。もっとその前には、デパートという物の売り方が生まれています。ボン・マ
ルシェというデパートがパリにできたのがはじまりです。今から150年ぐらい前です。デパートもず
いぶん昔からあったわけではありません。どういう作りかという、定価商法なのです。誰が入っ
てもいい場所なのです。買わなくてもいい。お金さえ払えば、誰でも、おとなでも子どもでも、物が
買える場所として作られました。お金さえあれば、極めて平等なのです。子どもが入っても構わな
い。高齢者だろうが、男性とか女性など問わずに誰が行ってもいい場所なのです。誰でもそのま
ま同じ物を買えるという仕組みができたのが、この社会なのです。さらにそれが庶民化していった
のが、このスーパーマーケットであり、今のコンビニなのです。ほとんど同じ構造になっているの
です。大量生産・大量消費の経済で、同じ機能のものがどんどん廉価になる。誰でも買えるよう
になる。これをぜいたくの民主化といたりします。極めて平等な仕組み、お金さえあれば誰で
も、という仕組みです。今の携帯電話、スマホをお考えになれば、おわかりになるのではないでし
ょうか。

ある基準にあわせての平等

さらに、身体もある基準に合わせてつくられるようになります。皆さんもなされたと思いますが、体
操です。これが学校の中に導入されていきます。いま、みなさんは基本的に、ピンと立ち、歩く時
は手を振って、腿をある程度上げて歩くのではないのでしょうか。昔の歩き方は、ちょっと腰を落とし
て、上下運動がほとんどなく、手も振っていないのです。いわゆるナンバ歩きのような、しゃなりし
ゃなり、という感じでした。その後、明治以降に学校で兵式体操を取り入れて、歩き方などの身体
所作を全部矯正したのです。手の上げ方から足の上げ下げ、歩幅まで全部指定があって、その
ように歩かせなさいと指定されています。歩き方から身のこなしまで、全部矯正してきたので
す。その集大成の場が、運動会です。いまでも、回れ右、前にならえ、起立や箱座りなどは、この
兵式体操の名残です。「産業的身体」といいますが、みんな一斉に同じように働ける体をつくり、

生産労働につけた。その結果、みんなが同じ価値観を思っ、同じように働いて、同じものを大量に生産して、同じようにお金をもらって、同じように同じものを大量に消費をすることが、平等だし、しあわせだし、嬉しいという社会ができ上がってくるのです。この写真は今から100年ぐらい前の自動車会社のアッセンブリーライン(組み立てライン)ですが、今の中国のアッセンブリーラインとほとんど一緒です。人間も同じように機械の一部のようにして、みんなが一斉に同じように、同じ行動で動けるようにしていく、同じものをつくって、同じものを欲しがるし、同じような価値をもつようになるといったことをやってきたのが、これまでの社会です。それが平等だったのです。

つまり、男女も平等だ、人間としては同じだと見なされる社会の中で、例えば体力的に劣る女性の方が区別されてきた。実は平等と言うのは、ある基準があるのです。その基準において平等だとされているのです。ですから、その基準に照らして、序列化が可能になるということが、実は平等という感覚なのです。皆が働ける能力がある、という基準に照らして、工場での生産労働を考えれば、同じ働ける能力であれば、体力があった方がよい、ということになり、それは男性有利な序列化を生み出します。また例えば、偏差値が高い低いと、未だにやっています。偏差値とは、ある基準、ここでは受験学力を基準にして、その子の学力が全体の中でどの位置、つまりどの序列にあるかを示すものでしかありません。なぜ、それが可能かという、誰もが学力という力を身につけることになっているからです。私も非常勤として偏差値47から50ぐらいの子を教えています。私が難しい本を読ませようとすると、最初見ただけで「イヤー」とか言っても、無理やり読ませたら、ちゃんと読むのです。理解も面白いのです。ある意味では感覚的なものだけど、本質を突いているのです。彼らとしてみれば偏差値で区切られてしまうと、平均ぐらいのところにいる普通の子だよって話になって、しかも社会はそれでオッケーにしている、そういう子は難しい本は読めないということになっているようなのです。だけど本当はその子たちの受験学力しか見ていない。受験学力は誰もが努力すれば身につくということが前提にされていて、それこそ平等だからそうなのだ、つまり努力すれば身につくものだと言われているのです。だから、受験学力が低いのは、本人が努力できない子だ、という見方をされてしまいますし、それが学校の中では、子ども自身が自分はそういうレベルの子なのだという見方をしてしまうことにつながっているのです。こういうことを見ていくと、私たちは何をどう考えたらいいのかといったことに繋がるのではないかと思います。

手段から目的は、量から質へ

今はもう価値観が多様化していく時代に入っています。今、国がやっているデジタル田園都市国家構想というのがあって、今20ぐらいの取り組みが動いているのですが、私も2つほどの地区に関わっています。高齢化が起こっている過疎地で、買い物難民が増えてきている。買い物難民を解決するための施策を、デジタルを使ってやりなさいと言われて、よくある事例は、買い物アプリを作って、スマホの中に入れて、高齢の方に使ってもらおう、というものです。でも誰も使ってくれない。それで、どうしたら使ってもらえるのか、と相談に来たので、まず日本の統計を見ましたかと

聞きました。日本で 80 歳以上の方でスマホ持っているのは 2 割しかいないので、ほとんどの方は使っていないですよ。講習会を開いて無理やり来させたら、まず「(画面が)見えない」と言われます。「こうやってやると大きくなりますよ」と、指を使って画面を拡大すると、全体がどこかにいってしまって分からなくなって、もう大混乱になるのです。私の方から、そういう方々もリモコンを使ってテレビを見ているのだから、テレビにこのアプリを入れたらどうですかと話をしたら、いやデジタルで解決しなければいけないから、スマホでなければ駄目だと担当者は言い張る。しかし、もっと大きな問題があるのです。例えば、孤独死という問題がありますが、「買い物難民死」は聞いたことがないのです。そうすると、買い物難民とは一体何なのかということをお問いたださなければいけない。私はデパートに妻の買い物について行くのは一番苦手でした。「お買い物につきあって」といわれて、2 時間ぐらいグルグル回って、「今日は欲しいものが無かったから帰るわ」と。それが買い物のある意味醍醐味だとすると、買い物難民とは何かというと、結局、友だちがいなくなってしまったりとか、地域の間人間関係が希薄になって一緒に行く人がいなかったりとか、そういうことが大きな問題だろうと思うのです。「今日の夕飯は何にする？」という話をしながら買い物するのが楽しいのであって、朝、アプリで頼んでおくと届けられたというのが楽しいわけではないはず。そうすると、買い物難民アプリを使うと、余計高齢者は孤立するのではないか。家から出なくなってしまい、余計に人と人との関わりを失くしてしまって、体力が落ちたり、認知症が進んでしまったりして、社会にうまく適応できなくなってしまうのではないか。「そんなことを考えたことありますか？」というと、「いや、全くありませんでした」と言われる。これが実は、この近代産業社会(工業社会)と言われている大量生産・大量消費の時代の一つの考え方なのです。物さえ買えばいいだろうとか、みんなが同じように物を買うのだろうと思ってしまうということが起こっているのです。そうではないはず。むしろ大事なことは何かと言えば、関わり合いとか繋がりとといったことを切断したことで、今までの経済は発展をしたということなのです。例えば皆さんが忙しくなって友だちとの関係でいろんなことをやりとりしなくなると、そのサービスを提供すれば買ってくれますから、経済が発展するのです。その意味では、人々が孤立していることが市場を大きくすることに繋がっていたのです。しかも人々は同じ人間として扱われているので、同じ物を欲しがらうという形で予測が立って、どんどん経済規模を大きくすることができたのです。今はもうすでにそうではない社会に入って、大きくすることもできなければ、価値観が多様化している。そんな中で、未だにみんな同じようにという議論をしていると、経済も発展しなくなってしまうということが起こっているのです。どうしたらいいのかわからなくなっているというのが、この 30 年間の大きな停滞のもとなのではないでしょうか。

私たちは今までの工業社会という社会では、労働力という手段であったり、購買力という手段であったりして、みんな平等だということで、自由に意思決定ができる平等な存在と言われました。でも、就職をしなければ生活ができないし、お金を儲けなければ自分の食べる物すら買えないという生活になっている。この社会、つまり私たちがみんな手段となっている社会では、自由で平等だからこそ、ある基準で測ると序列化ができるので、例えば男と女と分けたほうが効率的ですよと

いわれる。これに反発をしようと思うと、男ばかり上について、女が虐げられているから、女という字は、男にかしずいているのだと見えてしまうといったことが起こってしまう。このことは、その時代の価値観の中で、つまり男中心の社会の価値で女のあり方を考えようとするようになってしまうので、反発をしたり、抵抗したりする、つまり女が男と伍していくことしか起こらなくなってしまっていることの現れではないかと思うのです。

もっと違う価値があって、いろんな人たちがいろんな価値のあり方を実現することができるという考え方もあるのではないのでしょうか。その意味では、みんなが自分のそれぞれの価値を持って、それを認めあう関係を作っていく。そして、「それぞれ違うのだから、比べてはいけませんよね」というのが実は平等なのだというように、社会を変える必要があるのではないか。今まではみんな同じなのだから平等に扱えますよって言われていた。ある尺度に照らして同じなのだからと。だから序列化され、女は男よりも劣っているとされてしまった。質が違っているはずなのに、その質の違いは量の違いとして尺度ではかることができますよという話になっていってしまうので、序列化が起こるのです。だけれども、質が違っているのだから比べられないというのが平等なのですよねと言えば、ある一つの尺度で計って序列化することなどできないのです。

「認めあう社会」をたくさんつくる

そうなれば、何をしなければいけないかという、お互い認めあって、受け止めあって、一緒にやりましょうねという関係を作らなければいけない。そうしたことが、これから求められていくのではないのでしょうか。しかも、それが今の停滞した経済をさらに一歩次へ進めていく力になるのではないかと思います。

アメリカで人種に応じて、入試の点数を操作することが違法であると最高裁で決定がなされたというニュースがありました。人種に応じて、入試の点数を操作することなどの扱いを、アフーマティブアクションと言います。簡単に言うと、意図的な修正です。例えばクオータ制、女性の比率を25%に引き上げるといったことが不合理だという判定がなされたということなのです。実力主義で決めるべきだということになります。これも、平等主義の考え方に基づいています。東大は女子学生が2割にまだ達していません。3割に上げるとずっと言っているのですが2割にならない。教授が1,700人いますが、女性教授は1割いません。これも比率を上げなければいけないと言われているのですが、上がらないのです。反対意見があるのです。なぜかという、女性比率を上げるとい議論をすると、成績が悪かったり、または業績がなかったりしても、女性を採用するのかという反対意見が必ず出るので。成績で、また業績で較べるのが、平等であり公平なのだという見方です。私自身の感覚では、近代産業社会と言われている、従来の男をベースにして、男女は同じだから比較してもよいのだという考えをもとに作られた工業社会における学問体系から見ると、女性が劣ってしまっているという一面があるのだと思います。であれば、ちょっと無理をしても女性の比率を上げることによって、学問体系の枠組みを組みかえないと、何も起こらなくなってしまうのではないかと思います。女性の比率を上げるといったことと同時に、女性には男にな

るような研究の仕方ではなく、むしろ男が苦しんでいる研究のあり方を組みかえるような仕事をしたいというように思います。そうすることで学問のあり方は新たな違うものになってくるはずです。ただ、それを私たちは知らないのです。経験したことがないのですから。それは先ほど申し上げた、男が死屍累々である経済構造と同じです。男も生きにくいのです。勝ち組の男たちも、引退したら、やはり生きにくい。そうだとすると、この社会はみんなが死屍累々ということになります。それを、誰もが生きやすくなるような社会に変えていくことです。それこそ実は「共同」ということではないかと思います。女性が男性化することが参画することではなくて、むしろ女性が、ある意味では自分の特性を生かしながら、男社会を変えていく、そういうことが求められているのだと思います。それぞれの個性がきちんと尊重されて、それぞれがきちんと自分の役割が社会で果たせるように、お互い認めあっているいきながら、今まであった枠組みのあり方を組みかえていく力になるような社会のあり方を考えていく。そうしたことが本来の意味での「共同」ということではないでしょうか。従来のような自由と平等と言われたようなものが、組み変わっていく。今までは同じだから平等なのですよ、同じだから自由に動けるのですよ、決められるのですよと言ってきたが、これからはそれぞれが違っているのだから比べられませんよね、だから一緒にやりましょうよ、だからお互い平等に相手のことを認めていきましょう、そうすると誰もが自由になれるよね、という関係に組み替えられるのではないかと考えます。それを男女の関係を基本に考えると、男女共同参画ということになるのではないのでしょうか。女が男を補完するとか、男が女を補完するとか、ではなくて、誰もがそれぞれに違った存在として認めあえる社会です。それはまた、LGBTQ+の人たちにとっても、生きやすい社会ということなのではないのでしょうか。どうもありがとうございました。

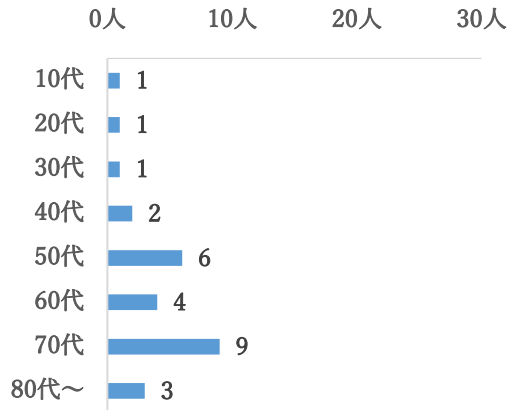
※その後、質問に対してお答えいただいた。

文責：令和5年度 習志野市男女共同参画週間事業 運営委員

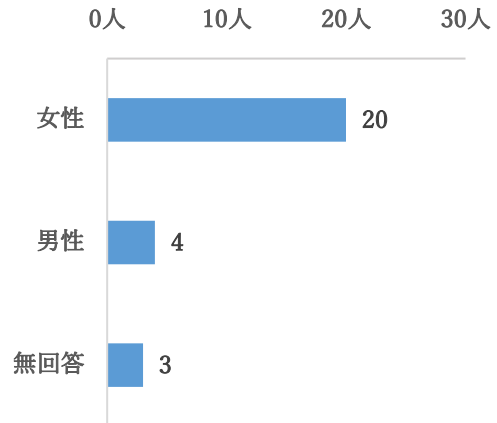


参加者アンケート

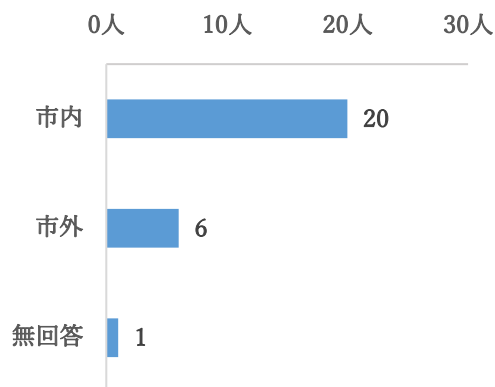
1. 年齢



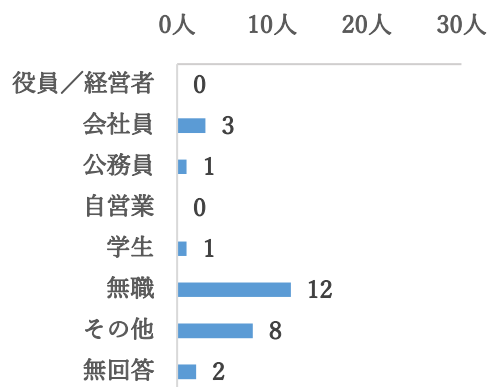
2. 性別



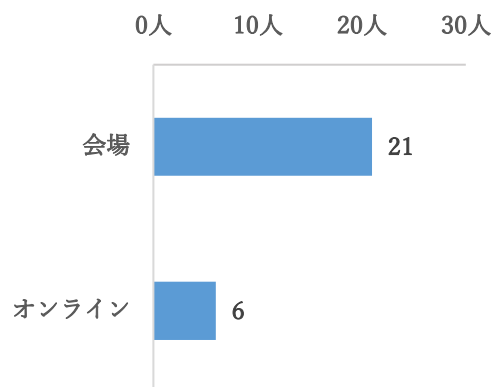
3. お住まい



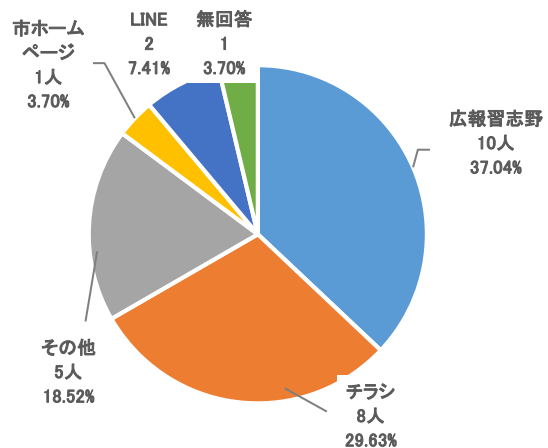
4. 職業



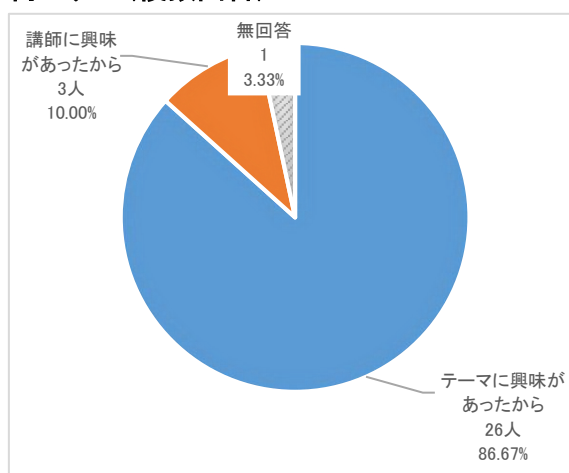
5. 参加方法



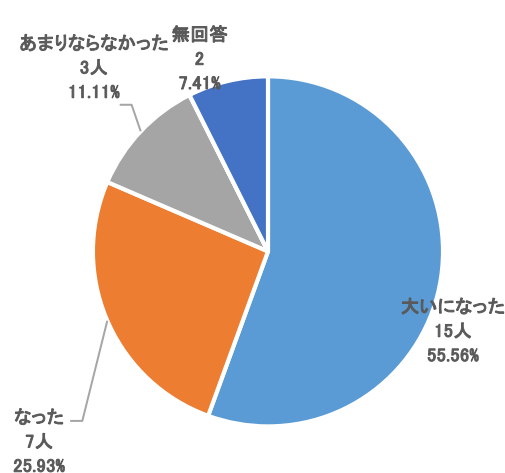
6. この講演会を何でお知りになりましたか



7. この講演会に参加した理由は
何ですか(複数回答)



8. 講演会の内容は参考になりましたか



- 「かわりが大切な社会」の考え方がとても良かったです。やりたいこと、好きなことで行動して社会を変えているという考え方に共感します
- 男女平等について、専門家の見解を聞くことが出来て勉強になりました。
- 学校と監獄は似ているという話が面白かった。私は教室で授業を受けるとき、なぜかいつも背筋を伸ばしてしっかり話を聞かなくてはならないという気持ちになる。これは授業を受ける身だから当然のことだと思っていたが、実は教室が監獄と似ている構造(一望監視装置)になっていて、自分たちがいつ見られているか分からない状態にさらされ続けていたことも関係しているからだとなり、社会性ってそういった力で身につけるものなんだろうか？自分の意志ではなく無意識でやっていたことが気付いてないだけであるんじゃないか？と考えるきっかけを貰えたから
- ご講演ありがとうございました。歴史から国の変化や、考え方の変化、自由と平等について考えさせられました。時代は変わり、社会が変わる中で、個性を尊重し今ある枠組みを変えるということ、はどういうことなのか再考したいと思います。
- とても貴重な機会でしたが、話が少し難しくあまり理解が出来ませんでした。
- 難しく、音声が悪く画面もよく見えなかった
- 目からウロコ、本当に面白かった。若者を大切にしたい。
- 視点を変えた考え方を知ることができた
- 新しい時代のいぶきを感じる話があった。若者が自分で考え、自立していく社会を期待する
- 今までの男女平等の観念が変わった。個の尊重と比べないで組み替えることへの方向が新鮮に聞こえた。
- 私自身が乳幼児の保育、教育に携わってきました。長年PDCAの循環の中で保育を進めてきました。AARの考え方の中で推移される保育は人を育てる人間も育つ子供達も

多様な世界を生きられる気がします。自分が楽しいと思える保育は子供も楽しい、自分
がな～んかつまらないと思う保育を子ども達が楽しいわけないそれが私の保育でした。
AARのサークルをもっと早く知りたかった。教育に対する統率され、管理された現場の在
り方は興味深かった。先生の話はひとつのことを、どんどん掘り下げて事の本質に迫っ
ていく、その組み立て、話の本質にたどりつくまでの、過程の内容も学びになった。

- 時代の流れに基づく現状と、これからの生まれる男女関係、これからの幸せへの方向に
ついて良く理解できた。現状→問題→対策の考え方解かり易い説明でした。
- 時間の使い方が、考え方が重要だと思った。同調の必要性
- これからの時代は互いに違いを認める事により枠組みを変えることが重要だと思った。
- 人間という視点に立って聴くことで、理解が広がったような気がする。社会や世界が広が
る。
- 明るい気持ちになりました。
- 大変、面白かったです。様々な角度からのお話で、それが良かった。もっともっと伺いた
いほどでした。
- 難しい部分もありましたが、分かりやすく面白い部分もありました。
- 良く理解出来なかったが、とても魅力的で面白かったです。考え方で参考になりました。
- 楽しかったです。(少し眠くなりましたが)
- 期待していた内容ではなかった。でも共感する部分もある。若者のじゃまをしないように
手助けをしていくといった言葉に共感した。
- 質問コーナーで理解できた。
- 難しくても良くわからなかった、ただ高校、大学の階段教室の意味がはじめて分かりました。
最後の話で今の若い子供達が外資系に就職することがわかった気がします。
- 発想の転換・面白かった。

反省点・改善点等(抜粋)

【企画・周知について】

- パネル展示・映画会もよいのでは。
- 多くの市民に聞いてもらえるような内容、方法があるとよい。
- 近隣自治体を参考に幅広い講師のピックアップが必要。
- 年代などのターゲットを絞ってテーマ決めをしたらどうか。
- とても良いチラシができた。もっと広く周知できたら良い。(各種広報紙や駅、商業施設など)

【当日の運営について】

- オンラインの精度向上が必要。
- オンラインと会場とのハイブリットは必要。
- テーマによって、会場中心・オンライン中心を検討しなければならない。若い世代をターゲットとするのであれば、オンラインのみなど検討していかなければならない。

「男女共同参画週間」とは

国は、男女が互いにその人権を尊重しつつ、喜びも責任も分かち合い、性別にかかわらず、その個性と能力を発揮することができる男女共同参画社会を実現するため、平成 11 年 6 月 23 日に「男女共同参画社会基本法」の公布・施行しました。

それを踏まえ、毎年 6 月 23 日から 29 日までの 1 週間を「男女共同参画週間」として、さまざまな取組を通じ、男女共同参画社会基本法の目的や基本理念について理解を深めることを目指しています。

令和5年度男女共同参画週間ポスター



＜令和5年度 習志野市男女共同参画週間事業 運営委員＞

【委員長】 植松 礼子(NPO法人 ウィメンズ・ウイングちば/
習志野女性史聞き書きの会・史の会)

【副委員長】 佐藤 佐知子(クローバーならしの)

【運営委員】 青山 千賀子

今井 純子(童謡フェスティバル in ならしの)

緒川 由里子(勇気づけ育児の会)

木村 暉子(脳いきいき夢アート)

国分 博子(習志野まちづくり研究会)

田島 裕子(新日本婦人の会)

立本 典子(習志野市消費生活研究会)

中村 克子(童謡フェスティバル in ならしの／脳いきいき夢アート)

幣司 義子(童謡フェスティバル in ならしの／脳いきいき夢アート)

松永 照義(ちば菜の花会 習志野支部)

まや(自助グループ MayaMoon)

【事務局】 習志野市男女共同参画センター(ステップならしの)